

蜜のあわれ

「あたいは殺されない

「ねじれも、ね卑おとひりアヒリもあ。」

「あ、ね卑おとひ、好よい」機嫌アハラりし、^よね。」

「「そなよ、お天氣アメイキなに、誰だり機嫌アハラ好くし、^よい

なきや懸スルいわ、ねじれも、れせせせしたお懸スルで、^よい

つしゃる。」

「「そなに朝卑アヒリへやつて來、またおねだりかね。ど

うも、あやしいな。」

「うつぶ、いや、ちがう。」

「じや句だ。囃して覧。」

「あのね、」のあいだね。あの、」

「うん。」

「」のあいだね、小説の雑誌巻頭にあたるの絵をおか
せこなつたでしょ。」

「あ、画いたよ、一足^かいる金魚の絵をかいた。それが

べつしたの。」

「あれね、とてもお上手だったわ、眼なんかぴちぴち
してて、とくもね。本物にそりへりだったわ。」

「頼まれて生れぼじめて絵^かのことを聞いて見た

んだよ。本当は繪だか何だか判らないがね。」

「あたしにも、やのうち一枚画いていただきたいわ。」

「繪は画」^かとしたて却々、^{なかなか} 画けるものではないよ。

君から見ると似ているかどうかね。」

「よく似ていたわ、それでね、あれから後に、一週間

程してから、雑誌社からお礼のお金が書留で着いた

でしょう。」

「これも生れてはじめて画料」といつものを貰つたのだ

が、それがどうかしたかね。」

「どれだけいただきになつたの。」

「文章が一枚半つじいでね、合わせて一万円貰つ

た。」

「おじさまはそれをわたくしひに、正面に仰向ひな
かつたわね。幾ら来ていつ」ともね。「
いく

「金魚にお金の話をしたついで、どうにもならぬじや
ないの。」

「だつて、あれ、ほんとつせ、あたいのお金じやない」
と、あたいをお画せになつたんだもん、あたいにくだ
れぬとばかり、へつねもつていたわ。」

「何だか僕もへんな氣がしないでも、なかつたんだけ

「どね、おじさま、われにひいてね。」

「あ、」

「もつお金、だいぶ、おつかいになつた。」

「半分つかつたけれど、まだある。」

「何に半分、おつかいになつたの。」

「十五百円の玉露を由田買つたし、雑子羽根のはた

きを一本と、赤玉チーズを一個買つた、……」

「あたいには、ひとつ、何も買つてくださいなかつた

わね。」

「君なんかの」とは、まるで、わすれていた。」

「おじれまはするいわね。あれ、本当をいえばあたい
のお金じゃないの。」

か

「アハーハーハーハーハー」なんかね。それを聞くと画がただけで、それがれるのね金になれるのかな。」

「あたし、このトロカド、総の方を細田のやうにした

のよ、で、ね、あれ斗争のお金、じたばんもだいわ。」

「一たこせみせ戻を貰ひつもつたの、」

「お友達の金魚をだくせと貰ひつぱる。」

「あ、やつが、遊び友達がいるんだね、それは『娘』がつ
かなかつた。」

◆ 本「キャストは、インターネット上の「図書文庫」の「キャストから抜粋して、

一部加工したものです。

「図書文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>)